

観艦式

カレッジ防衛モニター 青木健史

海と空とは、研ぎ澄ませればあのように蒼くなることを、私は知らなかった。
その蒼の世界を圧して、雄々と進み来る2つの艦隊。その間を、私の乗る艦に率いられた受閲部隊が粛々と通過してゆく。
10月18日(日)、相模湾。護衛艦「あたご」艦上でのことであった。

その光景を、その感動を、私は上手く言い表すことができない。このような感想を書く機会を設けていただいたにもかかわらず、私は、何度試みてもあの海上での感動を文章として再現する事はできないのである。

無論、記憶としてあるたくさんの出来事を記述することはできる。艦橋で気軽に写真撮影に応じてくださった山村護衛艦隊司令官とのこと、波の高い航海になり体調を気遣ってくださった宇仁艦長とのこと。各所できびきびと仕事を行う隊員の方々。それも確かに私の中にとっても素敵な一面として残っている。

しかしそれ以上に、私はどうしても、最も鮮烈な感動を覚えたあの一瞬を記述する事のできないもどかしさにかられるのである。それは、受閲部隊が受閲を終わり、今通過した観閲部隊の最後尾につくために「あたご」が左180度ターンを行った時の光景であった。

その瞬間を、私は前甲板で目撃した。眼前に広がったのは、どこまでも蒼い海を去りゆく2つの艦隊と、今こちらに向かい来る艦隊の3つの艦隊が、画面いっぱい埋め尽くしている光景であったのである。

その瞬間、海はすべての音を消した。私はあのように静かな、粛々といわれる艦隊の動きを、観閲を見たことがない。歓声を上げて感情を吐露しては嘘になるというような鮮やかな光景であった。艦隊が繰り広げる壮大さは、およそ一人の感情などまったくの嘘にしてしまうようなダイナミクスであった。

やがて艦隊は整えられ、訓練展示に移った。「しまかぜ」が礼砲を7発。胸に沁みるその音を聴いたとき、私は初めてそこで歓声を上げることが許されたような気がした。

夕暮れ。四方を僚艦に囲まれて、「あたご」は横須賀へ帰った。フネの帰る場所であり、海を守る自衛官たちの帰る場所であった。

観艦式。それは海を守る、その使命を背負った海上自衛官たちの真髄に触れることのできた、長くて短い、1日の航海だったのである。



護衛艦隊司令官山村海将と記念撮影 (本人左)

ちがさき消防防災フェスティバル2015

神奈川地方協力本部藤沢募集案内所(所長 鳥津准陸尉)は、10月25日(日)、茅ヶ崎市防災対策課が主催する「ちがさき消防防災フェスティバル」において、広報活動を行った。

同フェスティバルは、茅ヶ崎市内に所在するTOTO(株)茅ヶ崎工場において催され、防災に関するパネル展示、消防車・救急車の試乗体験や消防体験、第4施設群(座間)による自衛隊車両(31/2トラック)の試乗体験等が行われた。会場は大変な賑わいとなり、体験試乗エリアには長蛇の列ができていた。藤沢募集案内所のブースの迷彩服試着コーナーには、親子連れの人々が絶え間なく訪れ写真撮影を楽しんでいた。また、ブース内の災害派遣に関する活動状況写真に興味を持つ人が多く、茅ヶ崎市民の防災への関心の高さを感じることができた。

藤沢募集案内所は、「今後も地域におけるイベントに積極的に参加し、地域との交流と防衛基盤の拡充を図り募集成果の向上を目指したい」としている。



迷彩服を試着する3姉妹



茅ヶ崎消防局マスコット(ショーボーグ119号)もブースを訪れ災害派遣活動写真の前で記念撮影